

現代日本における青年期女子の「慰める存在」としての 移行対象とその心理的機能

Adolescent Girls as "Comforting Presences" in Contemporary Japan
Transitional Objects and Their Psychological Functions

西島 花音
Nishijima Kanon

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：青年期, 移行対象, 慰めるもの

Key words : Adolescents, Transitional objects, Comforting objects

1. 研究目的

移行対象 transitional object (以下, TO とする)とは, Winnicott (1953) が提言した概念である (井上, 2009). 乳幼児が肌身離さず持ち歩き特別な愛着を寄せる, 最初の自分では無い所有物 (例えば毛布やぬいぐるみ等) である (岩崎, 2015). TO は, 自分の内的世界と外的世界の間領域に存在し (Winnicott, 1971 橋本・大矢訳 2015), 不安を落ち着かせる, 自らを慰める要素を含有する (井原, 2006). TO は発達と共に, 慰める要素を保ちつつも, 使用状況は変化する. 空想の友達となる最終的に TO の慰める要素は芸術や宗教に拡散される. 乳幼児が TO を所有することは個人差や文化差の影響が大きく, 日本では欧米と比較し所有率は低かったと報告されている (井原, 2009). しかし, 近年, 日本の乳幼児の TO の所有率は現在急激に増加していることがわかっている (赤津, 2019). その理由として, 女性の社会進出, 核家族化などが TO 所有率の増加の一因ではないかとされている (赤津, 2019).

今後も女性の社会進出が進むと予想されるため, それに伴い, 移行対象の所有率が上がることが推測されるが, 日本における TO 研究は非常に限られる. さて, 森定 (2006) は, 乳幼児から青年期の人々に対して「先駆物」から「拡散された TO」に至るまでを対象とした研究を行った. それぞれ TO は, 分離不安や抑うつ気分を和らげる「慰める」機能を持っているとし, これを「慰める存在」と定義している. 「慰める存在」の範囲は広く, 日記 (森定, 2006) やコンパニオンアニマル (井原,

2009) など物だけではなく行為や生き物を含むとされている. TO における慰める機能に関しては Winnicott も指摘していた (森定, 2003) が, 青年期のみならず焦点を置いた「慰める存在」としての TO の研究には少なく, 大学生にとっての慰める存在についてはその知見が限られている.

ところで, 近年, 特に女子大学生の抑うつが問題視されている. そこで卒業論文では TO が拡散された形の 1 つとも言われる空想が抑うつに対して適応的に働いていると仮説を立て検証したが, 空想=慰める存在とはならず, すべての空想が必ずしも移行対象とはならないことが示唆された.

毛布やぬいぐるみの方に焦点を当てた従来の研究よりも, 内在化された TO の要素を含めることで, 「慰める存在」として範囲が広がり, 従来の研究よりも多くのデータが得られると推測する. その結果, より多角的な視点で「慰める存在」の持つ心理的機能について質的に分類し検討することで, 抑うつを多く抱えている女子大学生にとって慰めとなるものを理解することに繋がるだろう

2. 研究実施内容

本研究は, 現代日本における青年期女子の心理的安定や慰めを提供する「慰める存在」としての移行対象に焦点を当て, その心理的機能を包括的に理解することを目的とする. 従来の研究では, このテーマは主に物理的な対象に絞られ, 毛布やぬいぐるみなどが中心であった. しかしながら, 本研究では, 実態として存在しない, いわば内在化された TO の要素を含めることで, より多面的な視点から「慰める存在」を捉え, 新たな洞察を

得ることを目的として定めた。しかしながら、「慰める存在」という概念の定義を広く設定することで、多様な要素や視点を含めることができる反面、具体性を欠き、研究の方向性を見失ってしまったように思う。以上の研究計画を遂行するにあたり、研究体制として、指導教員の指導のもと行った。研究は個人で行う。指導教員による研究の指導は、研究の論理性、妥当性などを保つために必要だと考えた。

その一方で、研究方法については、ある程度固まった。調査対象者女子大学生 200 名程度を対象とする。調査方法は google form を用いた質問紙調査によって質的研究を行う。調査内容は森定(2003)が大学生に行った研究を参考に大きく三つのカテゴリーに沿って発表する。

- ①移行対象「0～6歳の頃、持っていると思えるような、気にいって大切にしている特定のもの(毛布、ぬいぐるみ、おもちゃ等)がありますか」
 - ②想像上の友達「あなたには、ストレスを感じた時、困った時に、心の中で話しかけたり、相談したりするような、想像の中での友達のような人やキャラクターなどがいますか」
 - ③慰める存在「あなたがストレスを感じた時、落ち込んだ時、ひとりぼっちで寂しいと感じた時に、どのようなもの(人)が心を慰めてくれますか」
- 以上三項目について所持の有無、所持し始めた年齢、消失の時期、対象の具体的な内容、どのような存在か、所持した頻度、所持しなくなった理由を自由記述で尋ねる。

分析について、現時点では、得られた記述の特徴を整理し、それぞれの記入内容に関してテキストマイニングによりカテゴリーごとに分類し、解釈することを予定しているが、改めて設定する目

的に合わせて都度変更する。

3. まとめと今後の課題

研究の第一段階で躓いたため、今後は焦点を再度定め、目標を明確にし、方針を見直したい。その上で、より具体的な研究の進め方や方法を検討し、新たな視点からの知見を得るための基盤を築く。まず、慰める存在の定義をより具体的に再検討する。これには、先行研究を再度精査し、慰める存在として捉えられる要素やその機能に焦点を当てることが必要だと考える。また、TO の概念を応用する際には、移行対象にだいたいひょうされるような物理的な対象だけでなく、精神的な支えや社会的なつながりなども視野に入れて再度、先行研究をあたる。

また、研究の目標が定まらず不安定であるため、目指すべき方向性を再度考え直す。具体的に、TO の概念を新たな視点から捉える目標に囚われていたが、その具体的な目的や研究の意義を明確にする。そのためには、慰める存在の役割や機能に関する研究の重要性や応用の可能性について、文献や先行研究から示唆を得たい。

方法については、一年間の間に実際のデータ収集や解析にまで至ることができず誠に遺憾である。今後は、研究計画の見直しや実施に向けた準備を更に進め、データ収集に向けての具体的なスケジュールを策定する所存だ。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(DB2331)「現代日本における青年期女子の「慰める存在」としての移行対象とその心理的機能」を受けたものです。